

# 保育カリキュラムにおける

## 年中行事の問題

平安女学院短期大学 片岡 靈恵

**研究目的** 保育カリキュラムの単元あるいは主題として取り上げられている事柄のうちで、年中行事に属すると考えられるものが最も多い。入園式に始まり、遠足、運動会、誕生会などを経て卒園式に終る園内行事と、五月節句、七夕、月見などの季節の変化にともない、園内だけでなく、社会的なつながりをもって行なわれる行事とがあるが、本研究においては、後者に類するものだけに限定する。

このような社会的行事は、古来、われわれ日本人の社会生活の歩みの中で営まれてきた。農耕社会の生活の必然から生れた行事、神事祭事と密接に結びついた行事などと、起源は異なるが、いずれも、日本人の生活を支配する力をもっていた。幼児の生活経験を中心とする幼稚園の教育の中に、これらの社会的な行動が重要な位置を占めてきたことは当然である。

しかし、現代の社会生活を見ると、既に、このような年中行事の慣習は、廃れつつあるようである。殊に都会においてはその傾向が著るしい。季節の区切りをつけることによって、生活のリズムに変化を与えたり、宗教的な催しによって、時折、人々の心を現実の世界から逃避させたりする意義は失なわれつつある。そして、現代人は、そのような行事の日を、単に、日常生活からの息抜きの日、リクリエーションの時として歓迎するようになってきている。幼稚園の教育においても、このような年中行事に、従来通りのウエイトをかけ

る必要はないのではなからうか。それよりも、もっと多くの新らしい教育内容が考えられるべきではないだろうか。

以上のような理由から、現在の保育カリキュラム——保育者の教育的意図からつくられたところの——を再考察してみた。

**方法と経過** 1、予備的調査として経験年数十三年の幼稚園教諭三十名の調査から、カリキュラムの中で主題(または単元)として取り上げている行事を上位から十えらぶ。すなわち、クリスマス、ひなまつり、五月節句、こどもの日、七夕、勤労感謝の日、時の記念日、口腔衛生週間、お月見である。

2、調査1を一般化するため、三五年度の保育雑誌二種を調べた。前記十の行事の内一つでも洩れている雑誌はなかった。

3、調査3は、家庭生活の中で、このような年中行事がどんな意味をもっているかを発見しようと試みた。A、幼稚園の行事に参加させるだけで家庭では何もしない。B、園ばかりでなく家庭でも、一つの行事として特別のことが行なわれる場合、C、全然知らなかったという場合、D、その他に分けて、昨年から在園している園児の家庭に答えを依頼する。

**結果と考察** 1、調査1の順位と、調査3のB項の順位を比較対称させるべく左のようになる。

調査 1		調査 3 B項	
(1) クリスマス	(6) 五月節句	1 クリスマス	6 ひなまつり
(2) ひなまつり	(7) 口腔衛生週間	2 こどもの日	7 母の日
(3) 母の日	(8) お月見	3 七夕	8 口腔衛生週間
(4) 勤労感謝の日	(9) 七夕	4 五月節句	9 勤労感謝の日
(5) 時の記念日	(10) こどもの日	5 お月見	10 時の記念日

右の結果から考察されることは、

一、クリスマス、こどもの日という新しい形式の行事が家庭生活の中で大きな位置を占めてきていること。

二、七夕、節句、月見のような季節的行事がまだまだ意味をもっている。

三、時の記念日、勤労感謝、口腔衛生週間など、教育的に考えられた行事は、園側の意図に反して、家庭に浸透していない。

四、行事を中心とするカリキュラムは、大きな教育効果をあげると考えられるから、主題となる行事の選択には充分考慮がはらわれなければならない。

2、調査3の対象家庭は、京都市内のキリスト教幼稚園児九二名（昨年から在園の者）  
（大会抄録135—138頁）

## 幼児の神仏観念について（第三報）

神田寺幼稚園 友松あきみち 深野浩代  
井山不二子 松村美沙子  
高木喜代子 米内みき

調査の目的 日本の幼児の神仏観念の現われとその発達について、過去二回にわたり調査報告した。今回は、その第三報で、キリスト教の影響の強いアメリカの幼稚園児の神観の発達はどのようであるかを検討したいと考え、少数ではあるが、米国のデトロイト、他等の協力を得て、日本幼児との比較をした。

調査の対象 三才四名、四才一〇名、五才六名、七才八才各一、計二五名。幼稚園に調査の方法を付記した英文質問紙を郵送して蒐

集した。（質問内容は、自然現象三問、神観一七問。第一報で既報した）

結果 自然現象に関しての質問は、四才後期から神を関連づけているものが、比較的少なくなつて「草や木を成長させるために」「空気がから」など、そのものの状態を示している。「この世の中は誰がつくつたか」によると、二十五名のうち十八名が「神」と答え、四才児でも六名が神と答えている。日本でも五才児においては、一般に神に対する観念が芽ばえてきてはいたが、米国児の場合は、四才においてすでに世の中を神が創造されたという神の全能と結びつけてきている。

神の観念については、「神の話をきいたことがあるか、誰に話をきいたか」の問に対し、米国児は八〇%が、日曜学校の先生や自分の母から話をきいてしており、日本の場合では、キリスト教立幼稚園において七四%きいたことがあるとなつていたが、全体的には三一%だけで大きい差がみられる。次に「それはどんな話か」では、「私達を愛してくれる」「神様は、私やこの世、鳥木をおつくりになりました」「神様はとても淋しかったので、この世と人々とお造りになりました」など年令差なく答えている。「他の神についてしていますか」に対しては、眠りの精と答えたものが一人だけで神は一人だけだということがわかり、全員が神を好きだと答えている。日本において、いろいろの神や仏があるのに対して対象的なものであった。

次に、「神の絵をかくてその中に自分もかき入れて下さい」の問には、神の絵はかけないからとか、自分を中に描き入れてない場合が多くあり、かいてきたのは十四名だけである。これは、私達が実際に質問を行つたのではなく、英文質問紙からだけでは無理があ